

Arsène Lupin, Célèbre Détective
Edited by Ayumi Yano

目次

赤い蜘蛛 5

刺青人生 131

プチグリの歯 255

鐘楼の鳩 291

訳者あとがき 310

解説 浜田知明 319

凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」（昭和六一年七月一日内閣告示第一号）にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。ただし意図的な当て字、作者特有の当て字は底本表記のままとした。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

本篇の主要人物

- ジャン・ドルサク……………伯爵、巴里の実業家。広大な別邸がある。事件はこの別邸で起る
- リュシアン・ドルサク……………伯爵の妻。病身
- ボアズネ……………六十才位、ドルサクの友人
- バノル……………ボアズネの親友、口喧嘩の友達
- ブレッソン夫妻……………陽気な芸能人、妻のレオニーはコーヒー占いをやる
- ベルナール・デブリウ……………ドルサクの学校友達
- クリスチアンヌ・デブリウ……………ベルナールの恋妻。ドルサクが彼女に惚れて野望を達しようと思つてい
る
- ドュージー……………巴里から来た刑事
- アメリカ……………ドルサク夫人の室付女中、多情な女
- ラブノ……………アメリカの亭主。やきもち焼き、家令兼給仕頭のような仕事をしている
- グスタブ……………庭番の甥の青年
- ルースラン……………予審判事
- アルセーヌ・ルバン……………俠盜

『赤い蜘蛛』について

保篠竜緒

ルブランのルパン物は、殆んど全てが、日本に紹介されているが、『赤い蜘蛛』がふしぎにも、残されて『ルパン全集』にも入っていない。

しかも、ルブランの作として、極めて異色のあるもので、同じ探偵小説の中でも、彼が師事したフローベル、それから、モーパッサンなどの影響を、その中から、多分にかがいがい知ることも出来る人情怪奇小説だ。

× × ×

この作の中では、ルパンは、怪盗としてよりも、任侠の士として活躍する場合が多い。いずれにせよ、この一篇は、読者諸氏に失望を与えることは絶対なからうし、号を追うて熱狂の度を高める傑作だと、私は信じている。

深夜の怪盗

遅い朝食をすませたジャン・ドルサク伯爵は、美しい妻リユシアンの差し出した手に軽く接吻くちづけて、翌日曜でなければ、邸へ戻れないかもしないと告げた。彼は一時半過ぎに巴里の事務所に着いた。着くと直ぐに、秘書のアーノルドが整理しておいた手紙や書類に目を通した。

間もなく秘書が来て大きな包を渡した。

「どうだ、いいかい」とドルサクがいった。

「あれは巧くいったか」

「ハイ」

「全部片付いたか？」

「ハイ」

「証券全部の中にあるね？」

「揃ってます。よく数えました。昨日の相場では六十万法フランばかり高値になりました」

「よろしい」とドルサクは満足らしい。

「今度のことについてちゃあ、君は実によくやってくれた。だがこりゃあ他言無用だよ、いいかい？」

「絶対に他言しません」

「ああそれからね、十五日前に来た時にだ、何故か解らんがこの抽斗ひきたしをあけて、書類をかきまわしたらしい気がしたんだが、その後の調べはどうだい？」

「何もありません。この室へやは、社長が別邸にいらしている間は閉め切つてありますし、私とタイピストの外には社員は二人しかいないんですし、無論鍵も持つていませんから……」

「そうかなあ……そうだねえ……俺の考え違いかもしれない、とにかく何も失くなつてはいないんだから……」

独りになると、抽斗をあけて、中を調べて見たが、別に盗られたものもない。彼は一つの抽斗の奥の方に手を突込んで、白い厚紙にくるんだ二包を引き出した。二つ重ねてゴム紐でくくつてある。ゴム紐を解いた。中から美しい女の写真が二十枚ほど出てきた。かつて盛んに発展した時に惚れたり惚れられたりした女達で、今日まで大切に蔵しまつておいたものである。

彼はストーブの前に行つて蓋を取り、火をつけると、想出の写真を皆投ほうり込んだ。

が、その中でたつた一枚だけ抜き出し、情熱的な表情でじつと眺めた。

「クリスチアンヌ！ クリスチアンヌ！」と呟く。「今更他の女に未練がない。俺の過去は火にくべてしまった。残つたのは君だよ、クリスチアンヌ」

伯爵は大股に室内を歩いていたが、卓上テーブルの上に置いてある証券の包を平手でドンと叩いて、勝利と歓喜の声を張り上げ、

「これで俺は物にしたぞ……物にした……こうなりゃのがしつこない……」

ジャン・ドルサクはそれから各方面を廻り友人に会つたが、仕事が思いの外はかどつたので、別邸に戻ることにきめた。戻ると九時に、夫人と夕食を共にした。

ドルサク夫人リュシアンは三十五才位、いつも悩んでいるらしい病身ながら、天性の美貌と麗質、蕩鬼男爵に自らおのずかな尊敬の念を起させるほどの貞淑な妻、結婚十五年で、平和な家庭生活を送ってきた。

「ボアズネさんやバノルさんから御返事が参りましたわ」と食後リュシアンがいった。

「招待をお受けになって、狩猟の初まる一週間前にいらっしゃるそうよ」

「すると十五日後だね」

「ええ、今あたし、ブレッツソンさん御夫妻の御返事を待ってますの。呑気で愉快な方々ですから、賑かですわ、いらっしゃれば……それからデブリウさんと奥さんとお招きしたいんですの」

ドルサクはハツとした。

「ベルナールとクリスチアン又かい？ だつてデブリウは断つたてじゃないか。乱暴な奴だからなあ……」

「ええ、でも獵がお好きですし、あたし、クリスチアン又にお電話しますわ」

ジャン・ドルサクは妻の顔を眺めた。極めて簡単に話をしていて、別段深い考えはないらしい。

「だが、ベルナールにしたつて、クリスチアン又にしたつてあまり面白くないぜ」

「ええ。でも、外の方をお呼びする間がないんですもの。それに八人分の用意をしました、そうすれば、あなたの御計画通り邸も満員ですから……」

「まあ、お前のいいようにしておくれ」

リュシアンは自室に引きあげたが、ドルサクは事務室兼用の書齋に残っていた。巴里の銀行が閉店後なので、証券の包をそのまま邸まで持ち帰っていた彼は、静かに包を開けて、新聞紙にくるくと

包みかえて紐でしばった。

彼の近くに、厚い壁面に切り込んで作りつけた大金庫がある。ポケットから小さい鍵を出すと三列になった文字盤を合せて金庫を開き、新聞紙に巻き込んだ証券束を入れて再び金庫を閉めた。

邸内の時計が十一時を打った。

彼は悠々葉巻をくゆらせながら、長椅子の中に身を沈めた。彼は今生涯での最良の時であった。幸福はまず物質から初まる。彼は今の財産がある。貞淑に夫に奉仕する妻を傍に、この巨大な富を享樂することが出来た。幸福は次に希望を生む。彼は今あの美しいクリスチアンヌ・デブリウに恋している。生涯で一度の恋であり、今日まで手に触れる事も出来なかつた彼女も、今は彼の執拗な熱烈な恋の対象として触れもし、掴むことも出来ることになつたのだ。

一時間が流れる。この沈黙と、不動の黙想裡に、ウツラウツラしている時、突然、カタリという微かながら怪しい物音が起つた。二度三度……彼は聞き耳を立てた。それは大広間と図書室につづく二つの扉ドアの方から来るらしい。誰れかがソツと開けようとしている気配である。……何んとも知れぬ怪しい奴……

ジャン・ドルサクは剛胆な男である。細心の用心をしながら、ソツと燈火あかりを消すと、闇の中にじつと待機した。

ソロソロと扉を押しあけるらしい。やがて扉が半開くと、真黒な人影がスルスルと入つて来た。

ドルサクとしてはこれまで待たずに、怪しい人影が室に入らない前に処置すべきだったが、妻のリュシアンが物音で目を醒ますことを怖れた。

サツと一躍すると、いきなり相手の喉を掴んで、グイと一押し、広間サロンの中へ押し倒した。

激しい格闘が初まった。双方無言のまま、床の上を上に下になり猛烈な取組み合いだ。ドルサクとしては自負心と自分の腕力を頼んで、敢て召使を呼ぼうとしなかった。が相手は意外に強敵である。

「誰れだツ、貴様」と唸った、「何にしに來やがった？ 云えツ、いえばゆるしてやる、でなけりゃあ、気の毒だが、ただじゃあおかないぞツ！」

彼としては何とかして相手の隙を狙って、燈火をつけ、敵の顔を見たいと思った。が相手は攻めるとか防ぐとかするのではなく、無茶苦茶に暴れて、もがいて身をくねらせて、懸命に押えられた手をふり切って逃れようとしている。ドルサクは相手を捻りつぶして取り押えようとあせった。

突如、敵は満身の力を籠めて、絞めた手をふり切ると、地を這って、闇の中へ逃げ出した。

ドルサクもすかさず後を追う。見ると黒影は勝手廊下の闇を縫って食堂の方へ走った。

彼も走った。廊下の突き当りには地下倉庫へ降りる階段がある。地下倉庫には裏庭に面した処に低い窓が切つてあるのだが、その窓はいつも嚴重に閉めきつてあるはずだ。占めた、袋の鼠だと思った。ところが窓が開いていた。

外では、曇った空の薄光りを通して、邸の横手へ廻って走る人影が見えた。つづいて後を追った彼は、右手、月桂樹の並木と川岸に行く二つの芝生の間を縫う小径で、再び相手の姿を見た。

ドルサクは近道を通つて川の流れを見下す小さい丘に昇った。見ると二十米許り下を曲者が逃げて行く。彼は早くも腰のピストルを抜くと曲者を狙って一発打放した。アツという叫び！ しかし手筈はあったが、傷は大した事ではないらしく、敵は遂に闇の中へ姿を消してしまつた。

ジャン・ドルサクの眼には何も見えず、耳には何も聞えず、四辺は森閑とした闇許りである。

こうなると断念も決心も早い彼である、追跡をやめて邸へ戻った。邸内は静かで、室々は暗く妻もまた眠っている。

彼は自室に引取って、そのまま眠ってしまった。

翌日、調べて見たが誰れ一人夜の椿事を知る者もなく、ピストルの音を聞いたものもない。彼はそのまま沈黙を守った。

それでも川岸に沿って、心当りを調べて見たが、何の跡もなかった。それでも念のため高い壁にそって裏手へ廻ると、平素ちつとも使っていない鉄棒をはめ込んだ小さい出入口がある。敵はそこから出入りしたのではあるまいか？ しかしこの小門を開けるには鍵がある。

が附近の草には人の足跡が残っていた。

十一時頃、邸へこんな噂が流れこんで来た。村から五百メートルほど離れた国道に、自動車に轢かれたらしい男の死体があった。ところがこの死体の左の腕に血に染ったハンケチが捲いてあり、そこにピストルの弾丸がめり込んでいた。

この男はピストルの傷のため出血多量から貧血を起して国道に倒れていたのを、通りかかりの自動車が轢殺してしまったのだという事である。では誰れがピストルでこの男を射ったのか？

午後、ドルサクは村の巡査の口から、この被害者の姓名を聞いた。アゲノル・バートン。巴里、ゲルネル街に住んでいる男である。

ドルサクは想い出した。三年前巴里の事務所で雇った男にアゲノル・バートンというのが居てその後別邸の労働者として使っていたが、ある時書類を引掻きまわしている現場を見付けて首にした事がある。

するとこのアゲノル・バートンが昨夜邸に忍び込んで、追っかけられて射たれたのだろうか？ 恐らくそれに相違あるまい。

すると、此奴がまたしても巴里の事務所の抽斗を引掻き廻したに相違あるまい。

すると、ここに問題がある。巴里の事務所と別邸の鍵はどうして手に入れたろうか？ また小さい裏小門の鍵と地下倉庫の窓の鍵は？ この四つの鍵をどうして手に入れたのか？

いや、その他に、彼奴は何を捜し求めたのだろうか？ ドルサクが重要証券の束を金庫に蔵った晩に忍び込んだ目的は何か？

こうした疑問がジャン・ドルサクの頭の中に数日間もやもやしていた。警察その他の調査では、被害の者の身元も家族も住所も解らなかつた、手帳に書いてあるバートンという名前も偽名らしく、一切有耶無耶うやむやになつてしまつた。

たまたま、ドルサクの使っている人間が殆ど当時と入れ替つてしまつたのでアゲノル・バートンが巴里の事務所使われていた事を知っているものもなかつた。

ドルサクはこんな謎にはあまりこだわらない男である。のみならず今は彼れが一身を賭しての恋愛の大冒険に直面してゐるのだ。

この小事件が、思わぬ大怪奇事件に深いつながりがある事は神ならぬ身の知る由もなかつたのである。

ルブラン原作、なのに日本語でしか読めないルパン譚

浜田知明（ルパン同好会会長）

昭和期の保篠訳は戦前版と戦後版（日本出版協同以降）とに大別される。戦前版はほぼ原書どおりの章立てで訳され（新聞・雑誌連載のものには例外もある）、戦後版では、さらに各章を幾つかの節に分けて（これは原書では『813』で用いられていた形式）、それぞれに小見出しを付すといった形に統一されている（この形式は、大正期の訳本において既に確立されていた）。

本書収録の四編のうち三編は戦後の初訳なので戦前版は存在しない。なので、テキスト底本に用いた初出誌版と、初刊以降（日本出版協同、鱒書房、三笠書房、田園書房、日本文芸社の各全集。これらの訳文はほぼ全同。特に鱒書房以降は同一紙型）との比較を行った。

赤い蜘蛛

原書の構成は『813』とはまた異なり、三部（各五章、四章、五章で構成）の前後に「プロローグ」「エピソード」を付す形になっている。

保篠訳は、初出誌（本書のテキスト底本）では部を廃して全体を十九章に訳し、初刊本（日本出版協同22巻）で三十十章に改められた。（他作品とは逆に）原書の章立てに近づけた形になったわけだが、章

分けは完全に原書どおりとはなっていない。
この章分けの異同は、次のとおり。

初出誌（本書）	初刊本以降
深夜の怪盗 恐ろしい予言 狼の眼 窓の人影 邪恋の眼	コーヒー茶碗の神秘 深夜の怪盗 恐ろしい予言 狼の眼
三ツの謎 夫人の行方は 寢室の扉 判事ルースラン 宿命の恋敵 ルパンの出現？	寢室の扉 三ツの謎 夫人の行方は 判事ルースラン
二つの鍵 女たらし 彼は殺さない 若い男 バルネ探偵局	ルパンの出現 二つの鍵 彼は殺さない バルネ探偵局
怪盗ルパンの推理 女ごころ ルパンはルパンだ	怪盗ルパンの推理

この『赤い蜘蛛』は約半分の抄訳だが（省かれているのは主に各人の性格づけとなる挿話や科白、

心理の綾など)、ストーリーの進行は原作に則している(「女たらし」の章における、女中と刑事のいやつきなども原作どおり。ただし、Brigadierは警察関係の「巡査部長」より憲兵隊の「班長」が適訳)。

保篠沢で付け加えられた箇所、変更された箇所は、次のようになっていて(本書での章題による)。

・「寢室の扉」での死体の胸に這う鬼蜘蛛。

・「ルパンの出現？」で盗まれた証券をパリから至急便で取り寄せたのだが、それが白紙にすりかえられ、「アルセーヌ・ルパン」の名刺が添えられていた。

・「二つの鍵」でベルナルを連行するのを、証券を届けに来た刑事とし、刑事が彼を励ます部分を追加。

・「女たらし」で女中といちゃつく相手を、その刑事に改変。

・「若い男」では、逃げるグスタブを巧みに捕える者として、その刑事を起用。

・「バルネ探偵局」以下、刑事に化けていたルパンが正体を現し、真相を語るシーンはすべて追加・改変部分。原作では、犯人を指摘・告発するのはクリスチアンス、最後にポアズネを摘発するのはルースラン判事(もちろん、脅迫まではしないが)。

・「バルネ探偵局」でのガニマル警部への言及箇所は『刺青人生』とは異なり、初刊本以降でもベシューに訂されていない。

ルパンが名を騙ったドゥージー刑事というのは、「ルパンの脱獄」「ブロンドの貴婦人」「ルパンの冒険」(エドガー・ジエプスンによる『戯曲アルセーヌ・ルパン』のノベライズに対する邦訳題)におけるパリ警視庁の刑事。ガニマル(ゲルシャル)警部の部下で、『813』にも登場する。

ルースランはこの後『カリオストロの復讐』にも登場するのだが、新たな偽名のルパンとは初対面

〔著者〕

モーリス・ルブラン

本名モーリス・マリー・エミール・ルブラン。1864年、フランス、ノルマンディー地方ルーアン生まれ。1905年に発表した「アルセーヌ・ルパンの逮捕」が好評を博し、アルセーヌ・ルパン冒険譚の作者として有名になる。41年死去。

〔訳者〕

保篠龍緒（ほしの・たつお）

1929年、長野県生まれ。本名・星野辰男。東京外国語学校（現・東京外国語大学）仏語科卒業。大正時代からモーリス・ルブラン作品の翻訳と普及に尽力した。戦後は警視庁等の囑託として広報・広告の指導等を行なう。68年死去。

〔編者〕

矢野歩（やの・あゆみ）

1958年、大阪市生まれ。81年、大阪大学経済学部卒業。現在、会社役員。主な著作に「ルパン邦訳史」(1)～(5) (2005、IVC『怪盗紳士アルセーヌ・ルパン (2)～(6)』[DVD-BOX]解説)など。ルパン同好会会員。

めいたんてい

名探偵ルパン

——論創海外ミステリ 220

2018年10月20日 初版第1刷印刷

2018年10月30日 初版第1刷発行

著者 モーリス・ルブラン

訳者 保篠龍緒

編者 矢野歩

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

イラスト 森田崇

ISBN978-4-8460-1761-3

落丁・乱丁本はお取り替えいたします